Fieldworker

【アイヌ文化】

「二風谷で培われた『ウレシパ』の種」

札幌大学副学長　本田　優子 氏

ほんだ・ゆうこ
札幌大学副学長。
1957年生まれ。
北海道大学文学部史学科卒業。札幌市在住。
著書:「二つの風の谷ーアイヌコタンでの日々ー」(筑摩書房)。

第五回目の「*Fieldworker*」は、アイヌ文化研究者の本田優子先生です。本田先生は、アイヌの口承文芸の研究で著名ですが、アイヌの若者に対する奨学金制度創設にも尽力されています。アイヌ文化の研究はもちろんですが、アイヌ民族・文化の現在と未来を見据えた活動をなさっている本田先生について、その原点を探りました。

◆先生がアイヌ文化研究を始めるきっかけを教えていただけますか?

さかのぼるとしたら、金沢で暮らした高校時代だと思います。当時の私は、言葉にこだわりを持っていました。私はおばあちゃん子だったので、多分私と同世代の人よりも金沢弁を結構知っていた方でした。それで、金沢弁が私の中である程度定着していたというか、親しみを持っていたのです。

でも、学校の授業中は、チャイムが鳴った途端に方言が消えて、いわゆる標準語に切り替わる。例えば、休み時間だったら、「ほや、私もそう思うげん」って金沢弁でいいますけど(笑)、授業になった途端に「はい、私もそう思います」ってなるでしょ。あれが、とても居心地が悪かったのですよ。それで、授業中でもなるべく金沢弁を使おうと突っ張っていたことがありました。おそらく、先生方にとっても居心地の悪いことだったと思いますが、結局そういうことが通せなくて、どうしてだろうという思いをぼんやりと持っていたのです。

大学に入り、萱野茂先生のことが書かれたある本を読んでいて、アイヌの人々が望んだわけでもないのに、言葉が消えていく、奪われていったというのはどういうことなのだろう、どういう気持ちだったのだろうと思い始めました。このあたりがきっかけでしょうかね。

◆萱野茂さんに初めてお会いしたのはいつですか?

卒業論文を書いていた時にお会いしました。卒論のテーマは、『開拓使時代のアイヌ政策』でした。その時に萱野先生が、朝日カルチャーセンターで講義を持っていらして、汚いジーンズ姿の若いのが一人参加しているということで、先生も覚えてくださっていました。その後、二風谷に遊びに行くようになったのです。

実は私、卒業後に大学院に行くつもりでいたのですけども、恥ずかしながら、英語が2点足りなくて、足切りにあって(笑)。卒論発表会で日本史の代表として卒論を発表したのですが、なんとその日の朝に大学院に落ちたとわかりました。仕方がないから発表はして、大学出た途端にわんわん泣きました。何も考えていなかったのにどうしよう、明日からって。でもね、こういう性格なので、泣くだけ泣いたらその日の夜にはケロっとしていました(笑)。

そして、これはきっと、一年間チャンスが与えられたということだなと思い、その日の夜のうちに萱野先生に手紙を書きました。「居候させてください」って(笑)。お手紙が着いたあたりに電話をしたら、「いいよー、おいでー」って言われました(笑)。それで、一年契約の居候で行ったのです。

◆それがフィールドワークの始まりになるのですか?

ごめんなさい、それが少し違うのです。もちろん最初はそう思っていました。1983年、私が二風谷に行った年にアイヌ語塾が始まったので、そのお手伝いを1年だけして、大学院へ行くつもりでいました。でも、萱野先生がご病気になられたので、もう私が繋ぐしかないと思ったのです。そのうちに、これは大学院進学より重要だと思うようになりました。だから、一生住むって決めたのです。そうすると、フィールドワークではなくなって、もう「住民」です。

だから私は、二風谷に11年も住みながら、自分の研究のためにマイクを立てたことが一度もありませんでした。後でみんなに「バカだ」って言われましたけどね。普通は11年もいたら、自分の研究のためのデータを山ほど残すのに、フィールドノートの一冊もなく、録音テープの一本もないのです。

◆住人として生活し、生活の中で自分を見ていたという、いわば究極のフィールドワーカーですね

「アイヌ語教室の先生」というちょっと特別なポジションではありましたが、地元では「(息子の)てっちゃんのお母さん」でしたから(笑)。

◆その後、研究者として生きる道を選ばれましたね

1993年に、アメリカ政府のご招待を受けて、アメリカの先住民族教育の仕組みを学べるという機会がありました。ちょうどプライベートな問題が起こった時期だったので、そこでお目にかかったロイド・エルム先生という凄い先生のところへ行って勉強したいと思いました。彼はドクターの学位を持っている研究者ですが、普通の公立小中学校の校長先生で、先住民族教育の素晴らしい実践者です。

そこで、お手紙を書いて投函しようと思った時、現在のアイヌ協会の佐藤事務局長から連絡があり、道立アイヌ民族文化研究センターができるので、非常勤だけどそこで働かないかと誘われました。その電話がなかったら、私は今、日本にいないかもしれません(笑)。

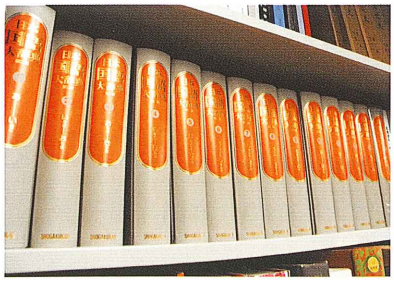
◆札幌大学に来られてからの二風谷との関係は?

二風谷に対しては、個人的な研究としての調査はほとんどやっていませんが、学生たちを受け入れていただいています。二風谷で実習した学生たちは、みんな二風谷が大好きになりますね。

◆先生にとって萱野茂さんはどういう先生でしたか?

ものすごく面白い方でしたね。多面的なの。例えば、水道が出なくなったら、夜中にでも当たり前のように掘り返して自分で水道管の工事をやっちゃう。なんでもできました。だから、なんとなく、萱野茂という人物に対する見方はちょっと一面的だと思っています。

でも、二風谷を出てから11年くらいは、ちょっと気持ちがすれ違っていました。なぜかというと、札幌に出ると決めた時に、最初に伝えるべき萱野先生に言えなかったのですよ。言ったら絶対に引きとめられるから。でも、二風谷で子ども二人を育てていけるだけのサポートを萱野先生に期待するわけにはいかなかったので、札幌での自活の道を選びました。萱野先生にすれば、裏切られたという思いを持たれたのは当然です。



本当の意味で元に戻れたと思ったのは、2005年に私が大学に就職してからでした。私は、初めてのボーナスで、あの日本国語大辞典を買いました。以前から、もしボーナスがもらえるような職業に就くことができたら、最初にあれを買うと決めていたのです。そして、ボーナスの三分の一くらいの金額を、萱野先生のところに包んで持って行きました。今まで本当に不義理をしました、というお詫びと、本当にありがとうございました、という感謝の気持ちからでした。

少しドキドキしながら差し出すと、萱野先生は奥さんの顔を見ながら大笑いして、「ほらな!」って。なんだろうと思ったら、「昨日、ロンロンケした」というのです。ロンロンケは、なにかを予知して顔とかがピクピクすることですが、萱野先生はそれで、「明日きっと、思いがけない金が入るぞ」ってお話をされたのだそうです。

もう、「ありがとう」よりなにより、三人でひたすら笑いました。その時に、ずっと心の底にあった澱のようなものが消えたように思います。

◆今後の研究について教えてください

元々が日本史でしたから、アイヌの歴史がどのように構築されていくのかに興味があります。例えば、江戸時代の和人の文献を読んでも、差別的なフィルターがかかっているのを感じます。どうしても自分たちの価値観で見ていますから。では、アイヌ民族の主体的な歴史というものはどのように築かれていくのか。もちろん資料批判をしながら、和人が残した記録を読み解いていくということは大前提としてありますが、でも、やはりアイヌの人自身の歴史意識をどこかで汲み取らないといけない。そこで私は、「物語」というのが使えるかもしれないとずっと思ってきました。

ただ、物語を歴史の資料として使うというのは凄く危険性を孕むことなので、やはり作法が必要だろうなと思っています。どこに気をつけなければいけないのかということです。例えば、児島恭子先生などの研究に学びながらやっていきたいと思うのです。

たとえば、アイヌ民族が交易の民だということが最近いろいろなところで言われていますが、実は物語からもわかります。アイヌの物語は社会において特別なポジションを占めているものであって、単なるお話じゃないのです。物語のネットワークが社会をある程度ルールづけて、維持していくために大きく作用しています。

その物語の中で、交易がどのように出てくるかというと、それは圧倒的な「善」なのですよ。つまり、社会に富をもたらす素晴らしい行為として捉えている。ひるがえって日本の物語を見ると、交易について出てくるお話はほとんどないと思うのですよね。人と人、異文化どうしが接触して、そこからいろいろなものを受け取って、それを自分の社会に持ち帰ることが、圧倒的な「善」であるという事例が、たくさん出てくるのです。アイヌが交易の民であったということの大きな証拠だと思うのですよ。それがはっきりわかってきたということは、物語を検証してきた大きな成果だったかなと考えています。

◆教育者としての展望、特に「ウレシパ・プロジェクト」について教えてください

「ウレシパ・プロジェクト」[註]のアイディアはある日「ポン」と降りてきたのです（笑）。アイヌの若者たちに奨学金を出して入学してもらい、一生懸命アイヌ文化を勉強してもらう。そういうことが一本の柱。もう一つは、それだけだと入り口の保証だけなので、出口の保証のために、それを企業と一緒にやっていくことにしました。最後に、アイヌの若者たちが入学してきてくれることで、大学内に多文化共生のコミュニティを作っていく、というのが三つ目の柱です。本当に自分でも驚くくらい、この三つが同時に降りてきたのです。

でも、降りてきたあとに、自分で気づいたのは、「これは二風谷にいた頃にずっと願っていたことだ」って。つまり、種はあったのだけれど、二風谷にいた時代はそういうシステムは必要だと要求する、あるいは願望するだけで、自分がそれをやるなんて思ったこともないですよ。どういう成り行きか、大学に職を得て、さらにどういう成り行きか学部長になって、そこで初めて「そういうことのために今、私はここにいるのか！」と後付けで気づきました。

自分はある意味「社会活動家」だと思っています。そもそも、二風谷に行ったときも研究のためではなくて、二風谷のアイヌの人たちのお手伝いがしたいと思って行ったわけです。ただ、大学という場で何かをやっていくためには、大学の内部に入るしかないし、ある意味こういう教員になるしかなかったのでしょう。変な言い方ですけれども、研究であればもっと優秀な方がたくさんいらっしゃいます。でもおそらく、ウレシパ・プロジェクトは私じゃないとできない。それは萱野先生が二風谷でやってこられたことをずっと見てきたことと、もうひとつは、今の社会がアイヌに対して何を行っているかということに対する理不尽さを強く感じていたので、それをなんとかしたいという思いがあるからです。

このウレシパ・プロジェクトは、いつも言っていることですけれど、アイヌだけのためのプロジェクトではないのです。それは、最終的には、多数者のためのプロジェクトだと、私はずっと言い続けています。弱者救済の恩恵措置ではないのです。

私が尊敬していたアイヌのおじいさんが、「優子ちゃん、アイヌの最大の不幸は、和人という低級な民族に支配されたことだ」とおっしゃいました。要するに、アイヌの問題はアイヌの問題ではなくて、多数者の側の問題なのです。我々は多数者としてあまりにも幼い。我々が成熟すれば、関係性は変わるのですよ。

今の日本社会は閉塞感に覆われています。我々がもっと多様性の感覚とか、多文化的な感覚を身につけたら、そんなことがうまく回っていくはずです。私はそれを、アイヌの問題を突破口に変えていこうとしているだけであって、これは我々の社会の問題であると思っています。だから、このプロジェクトは、我々自身が成長し、成熟するためのプロジェクトだと思っています。

◆大変意義深いプロジェクトであるとわかりました。ありがとうございます。

註

ウレシパとはアイヌ語で「育て合い」の意味。ウレシパ・プロジェクトは札幌大学が行う「多民族共生社会」実現のための計画で、次の3本の柱からなる。①アイヌ民族への奨学生制度、②学生の育成に協力する企業を募るウレシパ・カンパニー制度、③社会全体に共生の気運を発信するウレシパ・ムーブメント。

なお、ウレシパ・カンパニーにはアレフ、FUJI、北洋銀行、JR北海道など21社が参加している。